

伝えたいことを、順序立ててわかりやすく話せる子の育成
2年「ことばで絵をつたえよう」の実践を通して

豊川市立 小学校

1 はじめに

最近の子どもたちの様子を見てみると、話すことが大好きで、自分の話を聞いてもらいたいという気持ちは強い。しかし、いざ話す時になると途中で詰まってしまったり、教師が別の子と話をしていても、そのことに気づかずに話し始め、他の子の話を遮ってしまったりする姿が見られる。また、話の内容量が少なく、情報が足りないからか、聞き手が何度も聞き返さないと正しい内容が伝わっていない。

授業の中でも、発言をするために手を挙げるが、指名をされると「忘れしました。」という子や、発言途中で自分の話している内容が分からなくなり、途中で話すことをやめてしまう子もいる。子どもたちが様々な言葉や文字に触れる機会があまりなく、語彙力が育っていないことが原因ではないかと考えた。

本学級の子どもたちは、楽しかったことや、面白かったことを話すことが大好きである。月曜日には、週末にあったことを嬉しそうに教師に話しに来る子も多い。二年生になりできることが増え、行動範囲も広がり、より多くの体験を重ねている。その体験を伝えようと一生懸命話をする子どもたちであるが、その一方で、伝えたいことが相手に正しく伝わっているかどうかを考えると、細かい説明が苦手で、教師が詳しく聞き返さないと内容が伝わってこない子がいる。また、話したいことを順序よく整理することが苦手で、話の内容が相手に十分に伝わっていないと感じることが少なくない。

そこで、相手意識をもって話をすることや、聞き手に伝わるように話すにはどうしたらいいのかを考えてほしいと思い、本主題を設定した。

2 研究の構想

(1) めざす子ども像

・聞き手にわかりやすいように工夫しながら、順序立てて説明できる子

(2) 研究の仮説

仮説

絵の描き方を自分の言葉で説明する際の工夫を学習することで、聞き手にわかりやすいように、順序立てて説明できるようになるだろう。

(3) 研究の手立て

仮説の手立て

①単元の導入時に、絵の描き方の説明（不完全なもの）を聞いて、実際に絵を描くという体験をし、説明を正しく伝えるにはどのように話せば伝わるのかを意識させる。さらに、相手に伝わるように話すには、どのような情報が必要なのかを考えさせる。

②絵の描き方を説明するときに、どんな言葉を使うとより分かりやすい説明になるのかはつきりさせるために、「説明の仕方のポイント」としてまとめたものを提示する。

③互いの説明を聞き、絵を描く実践を行う。さらに、相手の説明が伝わったかどうかの評価を行う。

(4) 抽出児童〈A児〉

略

3 単元の構想

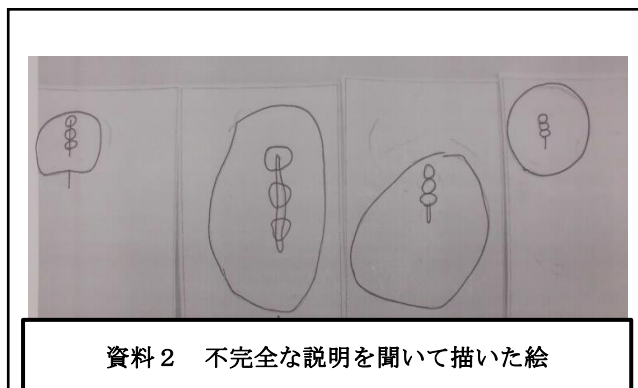
単元の構想は次ページの通りである（資料1）

4 研究の実際

(1) 正しく伝わっているのかな

子どもたちにとって、話し言葉という目に見えないものについて考えたり、評価したりすることは難しい。そこで、考えやすくさせるために、説明を聞いて絵を描かせるという実践を行った。絵の描き方が正しく伝わっていれば、情報通りの絵になるはずである。また、自分の描いた絵を見ることで、正しい絵になるためにはどのような情報が足りないのか一目でわかり、学びがさらに深まると考えた。

丸い形と線で表現しただんごの絵を、教師の不完全な説明を聞いて描くという活動を行った。「丸を三つ描いてください。棒をさしてください。お皿を描いてください。」という簡単な説明だけで、子どもたちは「何を描いているのかなあ。」「紙のどこに描けばいいの。」など、様々につぶやきながら描いていった。完成した絵は大きさや、描いている場所などがばらばらだった（資料2）。



振り返りには、「たのしかったけど、むずかしかった。ぼうをどこにかけばいいのかわからなかった。」と書かれていた。不完全な説明では描き方が分からず困った様子だった。

そこで、「今の先生の説明で絵が描けたかな。」と問うと、「絵は描けたけど、合っているか心配。」という声があがった。さらに「大きさとか、どこに描くかとか言わなかったから、よくわからなかった。」と、どんな情報が足りないのか、具体的に気づいている子もいた。子どもたちは描いた絵から、絵を描くためにどんな情報が必要なのかを具体的に考え始めたようだった。さらに、「今度は違う絵で挑戦したい。」「ちゃんとした説明でやってみたい」と、絵の描き方を説明してみたいという意欲の高まりを感じた。

そこで、本単元での目標を「目ざせ！せつめい名人」とし、相手に正しく伝えるためにはどのように説明すればいいのかを考えるという視点を与えた。

(2) 分かりやすい説明とは

相手に分かりやすく説明する＝相手に正しく情報を伝えることとして、どういった情報があれば、聞き手に話を理解してもらえるのかを考えさせた。子

どもたちからは「絵を描くときの形、大きさ、場所があるといい。」
「何を描くのかを先に言うと、ものが想像できるからよいと思う」という意見が出された。

そこで、分かりやすく説明するために①部分の説明ごとに何を描くのかを先に話す。②形、大きさ、場所、向きを説明する。という二つのポイントにまとめた。

しかし、教師の意図していた、③大きい部分から説明する、ということに気づいた子はいなかった。

そこで、上記の二つのポイントをおさえて、再度教師がだんごの描き方を説明し、絵を描かせた。③のポイントを入れると、説明はお皿→だんご→串の順番となるが、だんご→串→お皿の順番で説明をした。すると団子を紙いっぱい描いた子からは、「入らない。」という声があがり、お皿が紙に入らず描きづらそうにしている子もいた。「今の説明はどうかな。」と問いかけると、「先にお皿から描いた方がいいよ。」という声があがった。

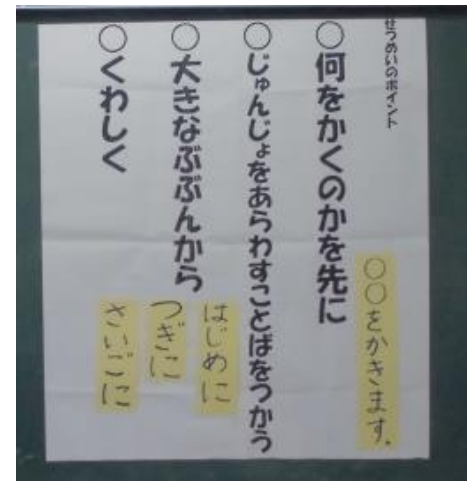
A児からは「すみのものから説明するとよいつてことじゃないかな。」とつぶやきの声が聞かれた。しかし、「すみから」という表現に悩んでいる様子だったので、再度団子の描き方を振り返った。すると、D児から「団子が乗っているお皿とか、大きいものを先に説明すると、中に絵が描けるんじゃないかな」という考えがあがった。この説明に他の子どもたちも納得がいった様子で、「じゃあ、動物だったら顔からなるよね。」と話す子もいた（資料3）。

こうして、絵を説明する時の三つのポイントを、全員で確認することができた。

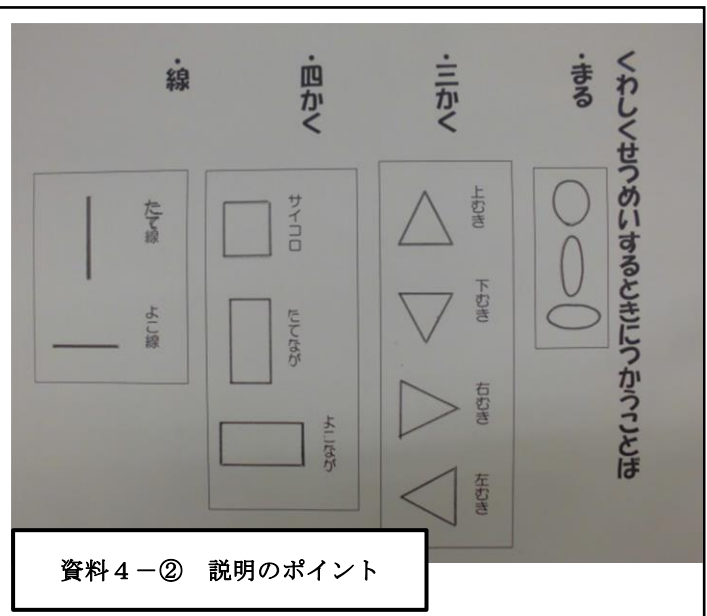
さらに、「はじめに」「つぎに」など、順番を表す言葉を使うと分かりやすくなることも付け加えた。また、詳しく説明するために、図形の形や大きさなどをどのように表現するのかを全員で統一した。こうして四つの説明するときのポイントが完

資料3 子どもたちとの対話

- T : もう一度団子の絵を描いてみよう
丸を3つ描いてください。
一番下の丸に棒をつけてください
お皿を描きましょう。
S1 : 団子を大きく描きすぎちゃってお皿が入らない
S2 : お皿がはみだしちゃった
A : すみのものから説明するとよいつてことじゃないかな
D : 団子が乗っているお皿とか、大きいものを先に説明すると、中に絵が描けるんじゃないかな
多数 : じゃあ、動物だったら顔から描くってことだよ



資料4-① 説明のポイント



資料4-② 説明のポイント

成した（資料4①②）。

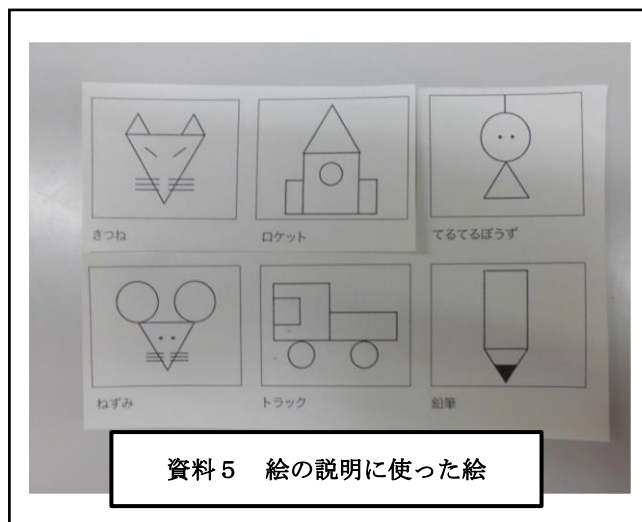
（3）説明の原稿を作ろう

一人ひとりに違う絵を与え、その絵の説明を考えさせた。どの絵も図形と直線の組み合わせからできていて、3～4回程の説明で一つの絵が完成できるようにした（資料5）。

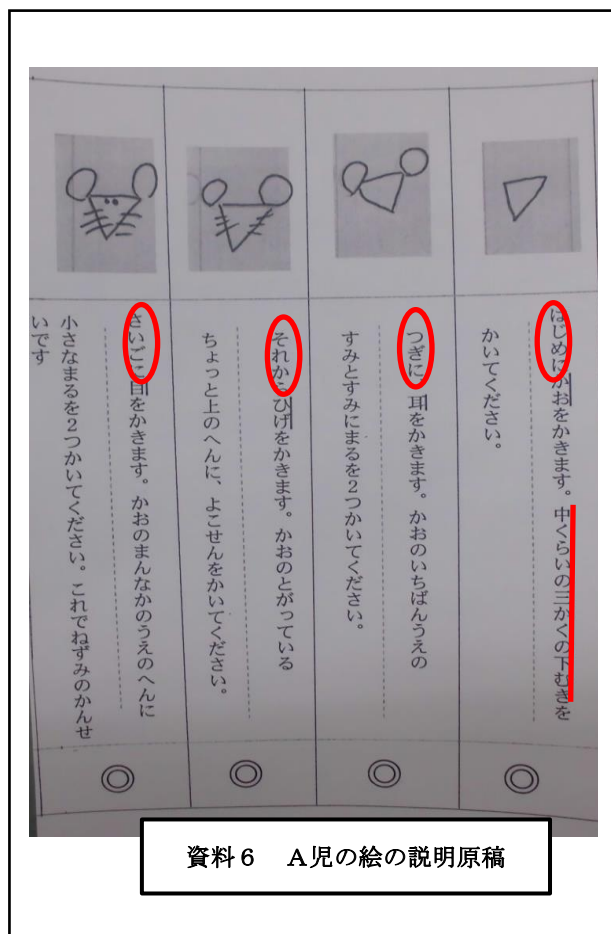
A児は始め、きょろきょろと周りを見渡していたが、やがて自分の絵の説明を作り始めた。A児には顔の形や、耳やひげの位置の説明に工夫が必要なネズミの顔を渡した。ネズミの顔の説明では、A児は始め「三角をかきます。」と書いていたが、三角だと△（上がとがっている）の形を描く子が多いと考え、「三角の下向き」（▽下がとがっている）という表現に直していた（資料6）。

さらに説明のポイントを見ながら、話す順序を考え、「はじめに」「つぎに」「それから」「さいごに」という表現を使い四つに分けて説明を書いていた（資料6）。「三角の下向き」「中くらい」など、大きさや方向を表す言葉は、学級で統一した表現になっていて、聞き手に情報が正しく伝わる表現を意識しながら、説明を考えていたと感じた。

A児の振り返りには、「むずかしかったです。どうやって書けばいいのかがわかりました。」と書かれていた。A児の原稿の作り方からも、説明の仕方を理解した様子をうかがうことができる。



資料5 絵の説明に使った絵



資料6 A児の絵の説明原稿

（4）せつめい会をひらこう

一人ひとりの説明原稿ができたところで、「せつめい会」をひらき、相手に伝わるかどうか検証をした。互いに違う絵の説明をする二人一組となり、話し手の説明を聞いて絵を描かせた。その後、その説明が分かりやすかったかどうか、話し手の説明原稿を見ながら、分かりやすかった表現に線を引いたり、◎○△で評価をつけたりした。互いに評価することを伝えると「ええ、緊張するなあ。」「◎がもらえるかなあ。」と不安な様子の子もいたが、相手に伝わるように説明することに緊張感をもち、意欲が高まった様子だった。

せつめい会では、一つの部分の説明が終わるたびに、聞き手がどんな絵を描くのかじっと見ている子が多く、自分の説明が伝わっているのか気にしている様子だった。絵の説明が終わり、聞き手から◎○△で評価されると、「やったあ◎だった。」と喜ぶ子や、「△がついている。どこが分からなかったのかな。」と聞き手に聞き返し、交流する姿が見られた。

せつめい会の後、聞き手に相手の説明のよかったところを発表させたが、「わかりやすかった。」「上手に説明できていたよ。」など、どんなところがよかったかの具体性を欠いた感想しか出てこなかった。話し手の意欲は高まっているが、聞き手からは「説明をしっかりと聞く」という意欲があまり感じられず、受け身で聞いているように感じた。

そこで、説明のポイントを再度確認し、相手の説明にポイントが使われているかどうかを確認するというのを改めて確認した。そして、ペアを変えて再度絵の説明に取り組ませた

すると、さらに意識して聞きながら絵を描いている子が見られた。説明が終わると、「◎はこの言葉がよかったからだよ。」や「場所がよくわからなかったから△だよ。」など、具体的に評価を伝えることができてきた。

また、「ここにそしてを入れるともっとよくなるよ。」「数が入っていなかったから、入れるといいと思うよ。」など、どうするとさらに分かりやすい説明になるのかアドバイスをしている子もみられた。

3回目では、A児の原稿の「かお」「みみ」など顔の部分を表す言葉に線が引かれていた(資料6)。聞き手が評価をする際に、A児の説明のよかった部分として書き込んだもので、A児に「ここがよかったよ。分かりやすかった。」と伝えていた。嬉しそうにしていたA児の振り返りには「全部◎でうれしかった。つたわってよかった。」と書かれていた(資料7)。自分が作った説明が正しく相手に伝わった嬉しさや安堵した気持ちが伝わってくる。さらに「もっとわかりやすくなりたい」という言葉もあり、A児の意欲が感じられる。

はじめは、原稿を作ることに難しさを感じていたが、友達から評価されたことで、話すことに楽しさや嬉しさを感じ、さらにやってみたいという意欲の高まりにつながった様子だった。

せつめい会は、聞き手と話し手が入れ替わり、全部で4回ずつ行った。回数を重ねるうちに、話し手も聞き手も、説明の中でポイントをしっかりとおさえているかという視点をもって学習に取り組むことができるようになってきた。自分の原稿を見直し、修正する姿も少しずつ見られるようになってきた。学級の中に、自分の説明は相手に伝わるかどうか常に意識をもって学習に取り組もう、という雰囲気広がっていった。

単元の終わりには、多くの子が「せつめい名人に近づけたと思う」「ポイントがわかったから、これからもわかるように話したい」など、相手に伝わっているかどうかを意識した振り返りをしていった。相手に正しく伝えるには、どんな情報が必要なのかを子どもたち自身が主体的に考え始めている様子を感じた。

資料7 A児の振り返り(3回目)

きょうは、ぜんぶにじゅうまるでうれしかったです。
ちゃんとつたわってよかったです。もっとわかりやすくなりたいです。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ・単元の導入で、不完全な説明を聞いて絵を描かせたことで、子どもたちは情報が足りないと、正しい絵を描くことができないということに気づくことができた。さらに、子どもたち自身が、分かりやすく伝えるためには、どのような情報を伝えればいいのかを考えるという視点を持ち、意欲的な学習につながった。
- ・説明するときのポイントを子どもたちと共に作り上げたことで、子どもたちが、より身近に感じ、ポイントを意識しながら説明原稿を作ることにつながったと言える。また、子どもたちと作った説明のポイントは、常に掲示し振り返ることができるようにした。そうすることで、子どもたちの学習に根拠をもたせ、自分の作っている説明メモが正しい情報を伝えることに適しているのかどうか、立ち止まって考えさせることができた。
- ・子どもたちが互いに評価をすることで、「伝わるように説明したい」という意欲をさらに高めることや、自分の説明をさらによいものにしたいという向上心の高まりにもつながったと言える。

(2) 今後の課題

絵の描き方を説明する原稿を作り、それを互いに評価させたが、話し手の方がポイントをおさえた説明をしているにも関わらず、聞き手の聞く力に差があり、正しく評価できないことがあった。また、個々の話す力、聞く力に開きがあるために、互いの評価をする際に十分に評価し合うことができなかったと感じる。交流する場の作り方をさらに工夫する必要があると感じた。

6 おわりに

実践の後、様々な場面で、A児の様子に変化が見られた。授業での発言では、話している途中で止まってしまうことはあるが、「ちょっと待ってて」と言い、自分で次に何と説明しようか考える場面が多く見られるようになった。そんなA児の言葉に他の子達からは「待っているからがんばってね。」という言葉や、A児の次の発言を静かに待つ温かい姿が見られた。みんなの前で話すA児の姿からは、以前のような不安な様子は見られない。自分の話に自信をもちつつあるA児の姿を嬉しく思う。これからも、子どもたちが話したいという意欲を持続しながら活動ができるように研究を続けていきたいと思う。